

フ ロ ム    ブ ラ ッ ク  
FROM BLACK  
～ド<sup>エス</sup>S極道の甘い執愛～

もくじ

FROM BLACK フロム ブラック ～ド<sup>エス</sup>S極道の甘い執愛～ 5

愛より深い、果ての黒 253

フ ロ ム   ブ ラ ッ ク  
FROM BLACK  
～ド<sup>エス</sup>S極道の甘い執愛～

## 第一章

緊急事態である。

私、椎名里衣がこの世に生を受けて二十年。二年前、育ての親だったおじいちゃんを亡くし、家族と呼べる人がいなくなった私は、高校卒業後に田舎から都会に出た。就職した会社は、なんの因果かブラック企業。仕事を辞めたいと思いつつも社長が怖くて辞められず、営業として馬車馬のように働いている。

この二年、数々の修羅場をくぐり抜けてきた。けれど、ここまでのピンチに出くわしたことがあつただろうか。いや、ない。

「これは酷いなア。ほら見てみるよ、バンパーがベッコベッコだわ。これはなんも言い訳できねエなア？」

「ぶつかってきた時は、チンピラが喧嘩でも吹っかけてきたのかと思ったっスねー」

「確かにそれくらいの勢があつたよな、ははは」

そう言いながら迫ってくる三人組は、とてもガラが悪い。危険な雰囲気をつんざかせていた。

一番はじめに口を開いたのは、スキンヘッドに蛇骨の刺青が入った男で、次はワインレッドの

シャツに黒ネクタイという、ホスト風の茶髪の男。最後のひとりは、逆三角形の黒いサングラスにアロハシャツを着た男だ。

はつきりわかる。この人たちはタチが悪い人種だ。まったく関わりたくないタイプだけど、今こうして私が絡まれているのは、自分のせい。

ここは国道で、日はとっぷり暮れている。

数分前、私は社有車に乗って、営業先から会社に戻っていた。そして、あろうことか接触事故を起こしてしまったのだ。

連日のサービスマンで疲労もピークを超えていたのか、赤信号で停車中、ブレーキを踏む力を抜いていたらしい。ハッと気づいた時には、目の前の車にゴツツとぶつかっていた。

慌てて外に出たら、ぶつけた車からもぞろぞろと人が出てきて——それが、先ほどのセリフを放った三人だ。

黒塗りの高級車。黒フィルムの貼られた窓。ガラのよくないお兄さんたち。

その情報だけでわかる。この人たちはいわゆる『ヤ』がつく職業なのだろう。

そんな三人が、ポケットに手突っ込んで顎を突き出し、私を囲い込んでいる。信号はすでに青になつてはいたが、周囲の車は私たちを避けて走っていた。

信号の目の前で停車し続けているのに、クラクションも鳴らされない。おそらく、あの様子はヤバイとみななわかつているのだ。君子危うきに近寄らず——と。

男たちはまるで肉食獣みたいに私を見ている。この女をどう料理してやろうか、と考えているの

だろう。

私がガタガタと震えて身を縮こませていると、ふいに黒塗りの車のドアがガチャリと開き、黒いスラックスに包まれた長い足が現れた。

新たに出てきたのは、驚くほど眉目秀麗で長身の男だった。柔和な笑みを浮かべ、眼鏡をかけている。

スキンヘッドの男が、振り向いて彼に声をかけた。

「獅子島」

獅子島と呼ばれた男は、ゆるやかに眼鏡のブリッジを押し上げる。

「まあまあ、そんなに威嚇しては、彼女も畏縮してしまふでしょう。可哀想に、震えていますよ？」彼は穏やかな笑顔で、気味が悪いほど優しく目を細めている。彼の言葉に三人の男たちの雰囲気や和らぎ、ふっと肩の力が抜けた気がした。

この人たちはヤがつく職業の方々みたいだけど、獅子島という人は、比較的優しいのかもしれない。ひよっとすると、このままお咎めなしで解放してくれるのかな。そんな期待を持って見上げると、彼はにっこりと笑みを向けてくる。

「とりあえず移動しませんか？ でないと、いつまで経っても取るものが取れないでしょう。大事な車を傷つけてくれたのですし、ちゃんとあなたの誠意を見せてもらわなければ、ね？」

優しく、いっそ甘いと言えるほどの猫撫で声で、男は悪魔のようなことを口にした。

顔が引きつり、身体がいつそうがたがたと震える。やっぱり獅子島も、ヤがつく職業の人なのだ。

本当に、私はどうして、よりもよってこんな人たちの車に社有車をぶつけてしまったのか。これが運命なのだとしたら、相当不幸な星のもとに生まれてきたのだとしか思えない。

私は社有車の後部座席に押し込まれた。隣にはスキンヘッド男がどっかりと座った。そして運転席にアロハシャツ男が乗る。逃げたくても、わずかな隙も見つからない。

黒塗りの高級車には、茶髪と獅子島が乗り込んだ。

社有車は走り出し、路地に入って小さなコインパーキングで停まった。黒塗りの車も隣に停車する。

スキンヘッド男に促されて社有車から出る。夜のコインパーキングは、まるでスポットライトのように白い防犯ライトに照らされていた。

「ご足労いただき、ありがとうございます。さて、これはまた派手に傷がつかまりましたね。後ろのバンパーがすっかりへこんでいます。修理に幾らかかるでしょうか」

男たちに囲まれた私に、獅子島が話しかけてくる。しかし私は答えるどころではない。

とにかく警察に連絡しなければ。震える手でポケットから携帯電話を取り出すと、あつという間に取り上げられた。

しまった！ 隠れて電話するべきだった。

携帯電話を掴んだ獅子島は、ニッコリと微笑む。私は顔から血の気が引くのを感じた。

「あの……」

なんとか声を絞り出すと、獅子島が「なんですか？」と返してくる。

「しゅ、しゅうりだいは、おいくらくらいかかるんでしょうか？」

この際、多少ふっかけられてもいい。それよりも、さっさとお金を払って逃げたい。しよせん、彼らの目的はお金なのだ。数十万なら、なんとか貯金で賄える。

獅子島はふむと相槌を打ち、顎に指を添えて、スキンヘッドの男に顔を向けた。

「お幾らくらいでしょうね。桐谷、わかりますか？」

「そーだなア。バンパーの交換、塗装、内部点検も兼ねるとなると、まあいいお値段になるんじゃないか？ 車だけで二百万くらいか」

「にひゃくっ!?」

声が裏返る。いやいや、ない。どんな高級車でも、バンパーをへこませただけで二百万だなんて。ぼくぼくと口を動かし、声にならない悲鳴を上げていると、アロハシャツの男が黒塗りの車をべしべし叩いた。

「直すのは車だけじゃないよ。ぶつかった時、強い衝撃を感じたからさあ。もしかしたら首を痛めてるかも。治療費も出してくれないと、割に合わないよね」

「それに修理に出す間、車がないとなると仕事に支障が出るし、病院通いするにも時間がかかるし、慰謝料も払ってもらいたいっスねー」

茶髪男まで乗ってくる。

獅子島に桐谷と呼ばれたスキンヘッドの男は腕を組み、威圧的に私を見下ろした。

「まあ、諸々の費用を合わせると、ザッと計算して七百万くらいかな」

「なっ……!？」

目玉が飛び出そうになる。七百万ってなんだ。新車一台を余裕で買える値段じゃないか。啞然として立ち尽くしていると、桐谷が心外そうな表情をした。

「割と良心的な金額だぞ。俺の知り合いは、車を軽く擦られただけで、千二百万くらい巻き上げたし」

「それはまた、実に金払いのいい人に巡り合えたのですね。うらやましい話です。きっと上手に話し合いをされたのでしょう」

そう言ったのは獅子島だ。

「相手が手を打つ前に、免許証と勤務先と住所を押さえたからな。妻子がいると簡単に払ってくれるし、家族さまさまだよ。ははは」

ほがらかに笑い合う獅子島と桐谷。しかし会話の内容はどう聞いても笑えない。

どうしたらいいのか。携帯電話は取り上げられてしまった。夜の帳が落ちてあたりは暗く、人の気配はない。ここで大声を上げたところで、駆けつけてくれる人はいるのだろうか。それよりも私が声を上げたことによって、目の前の男たちが激昂する可能性のほうが高い気がする。

私が思考を巡らせていると、獅子島があらためて声をかけてきた。

「さて、お嬢さん。七百万が相場だそうですが、今すぐ払えるとおっしゃるなら、示談成立。今回の件はなかったことにしましょう。しかしその表情を見るに、どうやらお金を用意するのは難しそうですね？」

力なく、こくと顔うなずく。どうしよう。どうすればいいんだ。私がぼんやりしていなければ、こんなことにはならなかったのに。

自然と顔は俯うつむき、黒いアスファルトをジッと見つめる。涙は出ない。泣いたところで、この人たちは許してくれそうもないが。

獅子島は楽しそうにくすりと笑う。

「さて、お金がないなら困りましたね。とりあえず財布を預かりましょうか」

「へっ、あ、はいっ」

はじめだった。いよいよ私はカスカスになるまで搾しぼり取られるのだ。獅子島は優しい表情を浮かべているが、やっていることは極悪である。顔のよさや物腰の柔らかさに騙だまされてはいけない。

そろりとポケットから財布を取り出し、獅子島に渡す。抵抗したところで奪さらわれるだろうから、今は言う通りにしておいたほうが利口りこうだ。

使い古された私のお財布は、黒の柔らかい革製。刻印のようにデザインされた花柄が気に入っている。高校の入学祝いにおじいちゃんが買ってくれた一品ものだ。

獅子島が財布を開くと、ファスナーにつけてお守りが揺れた。これもおじいちゃんにもらった交通安全のお守りだ。交通安全……効きかなかったよ、おじいちゃん……

「うーん。思っていたよりも赤貧せきひんな方ですね」

獅子島の言葉に、三人の男たちも私の財布の中を覗き込んで、声を上げる。

「うっわ、これはひどい。まさかこれ、全財産じゃねえよな？」

「そんなわけあるか。でも今時珍しいな。クレジットカードが一枚もないぞ」

「後はポイントカードとレシートだけか。しょぼいなー」

言いたい放題である。クレジットカードはなんとなく持つのが怖くて、作っていない。

確かに財布の中には千円札一枚しか入っていないが、私は必要な額しか持ち歩かないだけで、アパートにはまだ幾らかお金がある。もちろん銀行にも。さすがに七百万はないけれど。

「どうする？ コレ、売れるかな」

私を親指で示しながら、不穏なことを口にするアロハシャツ。

「顔はたいしてよくねエからなア。かといって身体がイイわけでもねエし。繁華街で小銭を稼かせぐくらいにしか、使い道ねエだろ」

スキンヘッドの桐谷は、私の頭からつま先までを値踏ねふみみするように眺ながめて、言いたい放題言う。余計なお世話だと思っただが、口には出せない。

獅子島は、困ったように腕を組んだ。

「ふむ。商品としては今ひとつのようですね。ですがこちらとしても、払うものは払っていただきたいですし、ここはひとつ、セオリーとは違う使い方をしてみましようか」

財布から抜き出した私の運転免許証を手に、にっこりと笑う獅子島。そして、ゆっくりと言ひ含めるように、私に話しかけてきた。

「これは提案ですが、あなた、うちで働きませんか？」

「……え、はたらく？」

獅子島を見上げると、彼は「ええ」と頷き、眼鏡の奥にある目を細める。

「私は会社を経営しているのですがね、前から事務員が欲しかったんですよ。あなたさえよければ、うちで働いてもらい、そのお給料でお金を払ってはいかがでしょう」

ヤクザにしては良心的な提案をしている気がする。金が払えなかつたら身体で稼げと言われるのかと思いきや、どうやら仕事内容は単なる事務員のような。悪くない。

だが、話には続きがあるらしく、獅子島はニコニコ笑顔で人差し指を横に振った。

「でも、それだけだと私がいい人みたいですよ。だからもうひとつ、あなたに務めを果たしてもらいましょう」

いい人みたいって自分で言わないでほしい。七百万を笑顔で請求してる時点で、まったくいい人じゃないし。

おかしな言い分をかざしながら、眼鏡の男は笑顔のまま「難しいことじゃないですよ」と言った。

「ただ、私の趣味に付き合ってくださいればいいのです」

「しゅ、趣味ですか？」

「ええ。ひとりではできない趣味を持っていますね。一応いくつかの条件があるのですが、あなたはなかなか素質がありそうです。きっと、私も楽しめることでしょう」

「……はあ」

何を言われているのかよくわからないが、私は適当に相槌を打つ。すると、桐谷が「へえ？」と

楽しそうな声を上げた。

「なんだ、獅子島。こういう娘が好みだったのか？」

「ええ。すれた感じのしない真面目な雰囲気が好き。初心（うぶ）そうなどころも高評価です」

「初心（うぶ）ねえ。単に童顔で田舎（いなか）くさいだけだろ」

何気に私をけなす桐谷。次に話に加わったのは茶髪男だ。

「でも真面目（まじめ）つ子をグチャグチャにする楽しみはありそうっすね」

「別にグチャグチャにしたいわけではありませんよ。真面目であることは私の趣味において大切な要素のひとつなんです。不真面目な人はすぐに堕（お）ちますからね。それではつまらないでしょう？」

なるほどー、と頷（うなず）く男たち。

私は話がさっぱり見えない上に、嫌な予感がひしひしとしてくる。

そうだ。嫌な予感（よかん）かしくない。獅子島は一見穏やかで優し（やさ）しそうだけど、確実にヤバイ人だ。そんな人が経営する会社の事務員なんて、絶対（ぜったい）ろくでもないところに決まっている。

それに、私は大きな問題をひとつ抱えていた。話が盛り上がっているところで水を差すのは勇気がいるけど、これだけは言っておかねばならない。私はおずおずと手を上げた。

「あの……、スミマセン。あなたの提案に乗るのは、たぶん無理（むり）だと思（おも）います……」

そんな私の言葉に、桐谷が「ああ？」と酷（ひど）くドスのきいた声を上げて睨（にら）んでくる。

はつきり言って、めちゃくちゃ怖い。だけどそんなに凄（す）んでも、無理なものは無理なのだ。私に転職（てんしん）は許（い）されない。否（いな）、会社（かいしゃ）を辞（や）めることが許（い）されないのだ。むしろ、辞（や）められるのなら、とつく

の昔に辞めている。

辞められないのは、私の勤める会社がいわゆるブラック企業だから。ヤクザとそう変わらない悪辣な社長のもと、私たち営業は慢性的な睡眠不足を抱えて、奴隷のように働いている。あの社長が私という働きバチを手放すわけがない。

迫力のある睨み顔に囲まれながら、私はたどたどしく自身の境遇を説明した。

——私の働く会社は、とある企業に属する小さなフランチャイズの工務店。住宅のリフォームや耐震工事が主な事業内容で、営業である私は、客から契約をもぎ取ってくるのが仕事だ。その営業方法は訪問販売とテレアポだった。

『常に瀬戸際と思え。目標売上は這いつくばってでも達成しろ。まずは身内に売れ』

そんな言葉を聞かされ続ける毎日。

営業は疲れ果てた手足を動かし、なんのために働いているのかわからないまま、働きバチのように担当エリアを回る。給料はほぼ歩合制。最低賃金は約束されているが、社長の満足する数字が取れなければ給料泥棒のレッテルを貼られ、地獄の説教と数時間にわたる正座を強いられる。私も何度か目標を達成できなくて、その地獄を味わったことがある。

本当はみんな、会社を辞めたくて仕方がない。しかし辞めることができないのだ。社長は全社員の個人情報を掌握しており、脅迫も辞さない鬼だ。

その鬼の所業を見たのは、元社員が退職しようとした時だった。彼は無断欠勤を繰り返し、退職届を送ってきた。すると社長は、彼の家族や親戚すべてに嫌がらせの電話をし、彼の中傷を書いた

ピラを自宅周辺にばらまいたのだ。終いに、『辞めたいなら損失金額を払え』と元社員を脅し、ノイローゼになるまで追い込んだらしい。結局その人は、身内から大金を借りて損失金額を払い、会社を辞めた。

逃げれば最後、尻の毛までむしられて泣きを見る。そう痛感した一件だった。

もちろん、公的な相談所に駆け込み、救いを求めるといふ手立てはある。しかしその後待ち受けている社長の報復を考えると、誰も行動に移せなかった。

求人雑誌には『アットホームな社風です』って書いてあったのに、毎日が絶対零度の寒々しい職場である。

それらのことを話し終えると、私の向かいでヤンキー座りをしていたアロハシャツの男が、「フーン」とかるーく相槌を打った。そして彼はすぱーっとタバコの煙を吐き出す。

そろそろこのあたりの住民が、フラリと夜の散歩に出てこないものか、と周囲を見渡してみる。しかし、ここは本当に都会なのかと疑ってしまうほど人通りがなくて、悲しい。

ぐー、と小さく腹の音が鳴る。夕飯の時間などどつくに過ぎているし、そろそろ会社に帰らないと、課長から文句の電話が来るだろう。

「なかなかブラックなところで働いてんだねー。苦労してんだな」

「悪辣でいいじゃねエか。俺はその社長、気に入ったなア」

「最近カタギのほうがタチ悪いって聞くんスねー」

世間話でもするかのように軽い会話を交わす男たち。ただ、獅子島は会話に参加せず、私の免許

証を眺めて黙り込んでいた。

「あの、つまりそういうわけなので、私は会社をすぐに辞めることができないんですよ。だから、どうか許してもらえないでしょうか。七百万は無理ですけど、修理代は払いますから」

「んーどうする、獅子島。さすがに七百万はやめとく？」  
アロハシャツの男が獅子島に声をかける。

ちよつと待て。『七百万はやめとく？』って、やっぱりその金額は、法外にぶっかけているって自覚しているんじゃないか。なんてひどいヤクザなんだ、と心の中で憤慨する。

すると獅子島はゆつくりと視線を上げ、私の顔をジッと見た。

「――椎名、里衣」

「え？」

私の名を呼んだ獅子島の視線が、ねっとりとして身体中にまとわりついた気がする。

奇妙な感覚に思わず身を震わせた。彼は微笑みこそ維持しているが、目が笑っていない。

それなのに、なぜか、嬉しそうに見えた。まるで、ようやく見つけたと言っているかのように。

「私は方針を変えるつもりはありません。あなたには七百万分、うちで働いてもらいますよ。……  
そうですね、数年といったところでしょうか」

「数年！ そんなに長い間!？」

「では、もつと稼げるところで働きますか？ 性風俗店でがんばれば、一年くらいでしょうか。ご希望なら、あなたを紹介しても構いません」

性風俗。そこで一体どのような仕事をするのか詳しくは知らない。けれど、不特定多数の男性に  
対して、いかがわしいことをするのはわかる。

……そんなの嫌すぎる。そもそも、どうして私はこんな状況になっているの？  
藁にも縋る思いで、私は獅子島に訴える。

「さつきも言いましたけど、私、会社を辞めることが難しいんです。あの社長が許してくれません。  
あの人はヤクザ相手でも平気で喧嘩を売る人なんです。鬼で悪魔で銭ゲバの拝金主義者なんですよ。  
だからどうか私を事務員として雇うことは諦めて、小金で我慢してもらえないでしょうか！」

「ふふ、それでは是非、社長さんにはその悪辣な手腕を振るってもらいましょうか」

獅子島は懐からスマートフォンを取り出し、どこかに電話をかけはじめた。私の必死の訴えなど、  
のれんに腕押し状態で、彼は聞く耳などひとつも持っていないらしい。

「――すみませんね、作業中に。実はひとつ、最優先でやっていたきたい仕事があります。内  
容は身辺調査。隅々まで洗ってください。対象は……」

言葉を書き切られ、チラリと見るのは私が運転していた社有車。車体に貼られたステッカーには、でか  
でかと社名が書かれており、獅子島はそれを口にする。

「はい。代表取締役を調べてください。……ええ、そうですね。では三十分後に」

電話を終えると、彼は懐にスマートフォンを戻しつつ、黒塗りの高級車の後部ドアを開けた。

「乗ってください」

「……え」

「せっかく見つけた働き手ですから、逃すつもりはありませんよ。このままウチの事務所に向かいますので、乗ってください」

まじですか。アパートに帰ることも許されないのでか。事態がめまぐるしく進んでいく。もしかして私、大変なことに巻き込まれている？

ゆっくりと状況をのみこんでいく。自分の立場を、自覚して――

気付けば地面を蹴り、逃げだしていた。このままではろくなことになるかと、本能が察知した。しかしそんなのは、抵抗のうちにも入らなかつたらしい。獅子島はすぐさま追いつくと私の手首を掴み取り、強く引つ張った。そのまま引きずられるように高級車まで連れていかれ、後部座席に押し込められる。

「や、やだ！ 許して。お金なら払うから、何年かけても払うからーっ」

「それはありがたい。是非、私の会社で働いてお金を払ってもらいましょう」

「違うの、今の会社で働いて返すって言ってるの。あなたたちは、お金さえ手に入ればいいんでしょう？ なんてあなたとところで働かなきゃいけないの。性風俗も嫌だけど、あなたの会社で働くのも嫌なのーっ！」

「ここであなたを解放すれば、すぐに警察に駆け込むでしょう？ 桐谷、出してください。曽我と黒部はその車を会社に返しておいてください。黙ってガレージに置いておくだけでいいですから」

「ういっス」

「了解っス」

コインパーキングに残ったアロハシャツの男と茶髪男が返事をする。それと同時に、いつの間にか運転席にいた桐谷がエンジンをかけ、車が動き出した。

「どうして？ バンパーをへこませたくらいで、なぜこんな目に遭わなきゃならないの！」

「それは厄介な私たちに出会ってしまったからです。運の尽きだと思つて、諦めてください」

「自分で厄介とか言わないで。これって拉致でしょ。警察にバレたら、捕まっちゃうんだから！」

「ええ、だから捕まらないうちに、あなたを隠しておかないとね。ふふ、里衣は威勢のいい娘ですから、なかなか楽しめそうです」

私の腕を掴んだまま、にっこりと笑う獅子島。

どうして彼はずっと、穏やかで優しい笑みを浮かべているのだろうか。まるで顔に仮面を貼りつけているみたいだ。そう思つた瞬間、身体がぞくりと震えた。

車は淡々と道を行って行く。どうやら繁華街に向かつているようだ。夜の街にふさわしい色鮮やかなネオンがあちこちを照らし、居酒屋やクラブといったお店が見えてくる。

車が停まったのは、そんな繁華街の一角。一階がシャッターつきのガレージになっている、コンクリートの三階建ての建物だった。ガレージで停車すると、車から降ろされる。

獅子島に腕を掴まれたまま、私は周囲を見渡した。

住宅という感じはしない。入り口は硝子扉だし、店名の書かれたステッカーが張つてある。

「ここ、どういうところなの。ヤクザの事務所じゃないの？」

「まさか。普通の事務所ですよ？ ヤクザにも生業は必要ですからね。こう見えて私たちも、真面目に働いているんです」

「う、嘘！ だつて……、真面目に働いてる人は、こんなことしない！」

二の腕を引つ張られて歩きながら、噛みつくように怒鳴り立てる。なのに獅子島は、「誤解ですよ」と明るく笑う。

「誰にも迷惑をかけていない。きちんと税金も納めていますしね」

「私はめちゃくちゃ迷惑してます！」

「それはあなたが先に迷惑をかけたからですよ」

「だ、だからって、いきなりこの仕打ちはない！ 車のバンパーをへこませたくらいで、どうしてこんなことになるのよ！」

ばたばたと暴れるが、腕を掴む彼の手は少しも力がゆるまない。

階段を上つて二階に着くと、三階へ続く階段と磨り硝子の扉がある。獅子島は右側の扉を開き、中に私を引きずり込む。

——そこは思っていた以上に汚く、いかにも男所帯な、タバコ臭い事務所だった。

フロアは広すぎず、狭すぎず、といったところだろうか。床は土埃にまみれて茶色く、目の前には汚れた応接セットの黒いソファとテーブルがあった。そこに置かれたアルミ灰皿は、吸い終わったタバコでハリネズミ状態だ。左側の壁は一面窓になっていて、その前にはスチールデスクが四つ置かれ、どれも書類の山がいくつもできている。天井を見上げれば、埃であちこちが黒ずんでおり、

ところどころに蜘蛛の巣まであった。

なんだこの劣悪な環境。思わず嫌悪の表情を浮かべると、脇から「お疲れさまです」とポソツとした低い男の声が聞こえてきた。

振り向くと、そこにはやたら背が高く、ひよろつとした男がいた。薄汚れたジーンズに、グレーのパーカーを着ている。酷く猫背な上にフードを目深に被っているせいで、顔の造りがよくわからない。

「滝澤。急に調査を押しつけて悪かったですね」

「イエ、仕事ですから」

獅子島はパーカー男——もとい滝澤の返事に頷くと、私に声をかけてくる。

「里衣。こちらは滝澤虎雄と言います。桐谷、あなたも挨拶してください」

スキンヘッド男は、ソファでタバコを吸いながら軽く手を上げる。

「……桐谷揚武だ」

最後に獅子島が、にっこりした笑みを向けてきた。

「私は獅子島葉月と申します。よろしくお願いします」

「はあ……」

全力でよろしくしたくない。しかしそんなことは言えず、曖昧な返事をしておいた。

ふいにジットリした視線を感じる。横を向くと、滝澤がフードの陰から私を見ていた。

これはもしかして、私も自己紹介しなくてはいけない空気なのだろうか。しばらく悩んだ後、口

を開いた。

「私は、椎名里衣と言います」

ぺこりと頭を下げる。

シンとした事務所で、天井の蛍光灯がしらじらと私たちを照らす。窓の外から酔っ払いの笑い声が聞こえてきて、外の世界とはまったく違う雰囲気居心地が悪くなった。

……自己紹介、しないほうがよかったかな。

私がそんな思いに駆られた時、入り口のドアがガチャリと開く。

「ただいまー！」

「帰ったっス！」

その声で、一気に事務所の雰囲気が明るくなる。入ってきたのは、先ほど会ったばかりの男ふたり。茶髪にワインレッドのシャツ男と、逆三角形のサングラスにアロハシャツの男だ。

「おかえりなさい。今、里衣に自己紹介をしていたのですよ。これからは共に働く仲間ですからね」

さらっと言った獅子島に、私はとっさに抗議する。

「ちよつ、私、まだ了承してない！」

「俺は曾我竜也だよ。よろしく、里衣ちゃん」

私の言葉などサラッと流して挨拶したのは、アロハシャツの男。続いて茶髪のホスト男が敬礼するように片手を額に当てた。

「黒部敏だ。これからよろしくな。いやあ、これからは面倒な事務処理をしなくていいかと思うと、気が晴れるな。滝澤もそう思うだろう？」

はっはっは、と笑った黒部は、滝澤の肩をぼんと叩く。滝澤は無言だったが、小さく頷いた。

「さて、全員揃ったことですし、さっそく滝澤の報告を聞きましょうか」

さくさくと話を進める獅子島さん。私は慌てて彼のスーツをぐいっと引張った。

「ちよつと勝手に話を進めないでよ。大体、社有車がいつの間にか会社のカレージに置かれていて、運転していたはずの私がいらないなんて、どう考えても事件じゃない！ 今頃きつと警察が——」

「心配なさらなくても大丈夫ですよ、里衣」

「心配してないです！ わ、私を誘拐なんてしたら、警察が絶対に動いて言うてるの。大事になる前に解放したほうが、身のためだよ」

「残念ながら今の警察はこれくらいでは動きませんよ。それに、あの会社はもうすぐあなたに構っていられなくなりますから」

にこにこ笑って、不穏なことを言う獅子島。

一体どういう意味だろう。思わず眉をひそめると、滝澤がポケットからスマホを取り出し、操作をはじめた。そして口を開く。

「株式会社リフレトラスト代表、渡島健次郎。五十二歳、バツ一。無類のギャンブル好きで、多額の借金を抱えている。ヤミ金にも手を出していた」

「……え？」

リフレトラストは私が勤めている会社で、渡島は社長だ。しかし何を言われているのか理解できず、首をかき上げる。

そんな私をよそに、滝澤はスマホを片手に淡々と『報告』を続けた。

「カネは現在返済中。自社の利益に手を出している」

「なるほど。会社のお金を着服して、ヤミ金の返済にあてているのですね」

——借金、ヤミ金、利益の着服……着服？

滝澤の言葉を脳内で整理していて、思いつき引つかかった。

「ま、待って、あの社長、うちの会社の利益を着服してたの？」

戸惑う私の言葉に、滝澤はコクリと頷く。啞然とする私。しかも、滝澤の報告はまだ続く。

「内縁の妻と同居している。女はスナックの経営者。四十五歳、バツ二」

「ふむ、セオリー通りの小者ですね。これなら簡単に潰せそうです」

「つ、潰す？」

物騒な発言に目を丸くする。獅子島は「ええ」と事もなげに頷いた。

「あなたが自主的に会社を辞めることができないのであれば、会社ごと潰すしかないでしょう？ どうせブラックな会社なんですし、困る人なんて、社長さんご本人くらいしかないのでは？」

「そ、それは……」

言い返せない。確かに、社員はみんな辞めたがっているし、モラハラに悩まされてヘトヘトだ。

だけど、そんなに簡単に話が進むのだろうか。会社を潰すなんて、決して容易じゃないはず。

しかし獅子島はニコニコした笑みを崩さず、私の背中を軽く叩いてきた。

「里衣はなんの心配もしなくて結構ですよ。すべて私のほうで片付けておきますからね。とにかくあなたは、ここで七百万円働いてくださればいいのです」

「待ってよ！ その七百万って、正当な金額じゃないよね？ 単なる言いがかりでしょ！ どうして払わなきゃいけないの！」

「ふふ、法にのっとった請求書が欲しいのですか？ それでしたら後日、いくらでも用意して差し上げますよ。ですがこのままだと、あなたはいつまで経っても隙を見て逃げ出しそうですね。かといって、四六時中監視するわけにもまいりませんし……」

ふむ、と困ったように腕を組む獅子島。やがて、名案を思いついたと言うようにポンと手を打った。

「里衣、ふたつ選択肢を差し上げましょう」

「選択肢？」

「はい。監禁か軟禁、好きなほうを選んでください」

な、何を、言っているんだろう、この男は。

「どっ、どっ、どういう意味？ か、監禁か軟禁って！」

「監禁を選んだ場合は、その倉庫で生活と仕事をしてもらいます。軟禁を選んだ場合は、この上にある私の部屋で生活して、日中はこの事務所仕事をしてもらいます。当然ですが、私の許可なしで外出することは禁じます。電話で助けを求めるのもだめですよ？」

にこのこと獅子島が説明するが、うまく理解できない。ただ、彼が私に究極の選択を強いている  
ということにはわかった。

「い、いくつか質問があるのだけど、まず、倉庫って何？」

『おちつけ。里衣、おちつけ』と心の中で繰り返しつつ、思いついた質問を投げしてみる。

すると獅子島は楽しそうに微笑み、すっと人差し指で事務所の一隅を示した。応接セットのすぐそばだ。

「あそこです」

そこにあるのはスチールドア。曾我がガチャリとドアを開けてくれる。

その部屋の中には、段ボールやガラクタが詰め込まれていた。広さは六畳ほどだが、物が多すぎ  
て足の踏み場がない。

「こ、こんなところに監禁されたら、寝る時はどうしたらいいの！ あとトイレとかお風呂とか！」  
「誰かがいれば出して差し上げますが、いなくなったら我慢してください。お布団は用意してあげ  
ます」

待て。我慢なんて無理です。人間の生理現象はどうにかできるものじゃない。

私は唾然として倉庫を眺めてから、ギギギと獅子島に顔を向けた。

「もうひとつ質問なんですけど……、た、例えば軟禁を選んだとして。あなたの言葉を無視して逃げ  
たり、電話で助けを求めたりしたら……私をどうするのでしょうか？」

オドオドと問いかける。すぐ聞きたくない質問だったが、聞かないのも怖かった。

獅子島はまるでその質問を待っていましたとでも言うように、満面の笑みを浮かべる。

「私は、周りの人たちに、執念深いと言われていましたね」

「はあ」

「一度恨んだ相手は絶対に忘れません。女性でも容赦するつもりはありません」

「と、言いますと……？」

「つまり、一時的に警察で保護されたとしても、私はあなたを逃がすつもりはない。警察の保護が  
解けたら、すぐに捕まえて完全に監禁しますね。ただ閉じ込めるだけでなく、逃げられないように  
物理的な処置を施します」

指をふりふり揺らして、獅子島は酷いことを言う。

「あ、あの、物理的な処置って、どういう」

「一応、私も長くこの世界にいますので、逃げ切るのは不可能だと思ってくださいいね」

「質問に答えてー！ 物理的って、何をどうするの!? 私に何をやるの!?」

必死になって問い質すと、獅子島は眼鏡のブリッジを指で押し上げ、「内緒です」と言った。

「わからないほうが恐怖心を煽るでしょう？ そうなった時のお楽しみ、ということにいたしま  
しょう」

「お楽しみ!?」

私はまったく楽しくない。そして、完全に逃げ場をなくした気分だった。

車のバンパーをほんの少しへこませただけで、怪我人もいない。本来なら、警察と保険会社に電

話すだけですべて解決するような些細な事故で、私はこんなところに囚われるのか。

……すべては、関わった男たちがならず者だったから。

カクリと肩を落とす。どうやら無駄な抵抗はせず、この状況において、私にとってマシな選択肢を選ぶしかないらしい。

「軟禁で、お願いします……」

「物分りがよろしいですね。では軟禁ということで。あなたにお願いするのはひとつだけですよ。許可なしにここを出ないことです。わかりやすいでしょう？」

「嫌になるほどわかりやすいです。……本当に、七百万円分働いたら、ここから出してくれるの？」

「ええ、もちろんです。後でお給料の話をしましょうね」

獅子島の狙い通り、というところなのだろう。『そう言うと思っていました』とばかりの態度が気に入らなくて、私は強がってみせる。

「私が大人しく軟禁されたところで、足がつかないとは限らない。明日警察が押し寄せてきても、知らないからね。私はそうなってほしいけど」

「それは怖いですね。ではさっそく、手筈を整えることにしましょう」

獅子島は余裕めいた表情で、おどけたように肩をすくめる。

「滝澤は曾我と一緒に、例の社長の居場所を探してください。黒部はフランチャイズの親会社に連絡を。桐谷は社長の内縁の妻という女を捕まえてください。私も所用を終えたら合流します」

獅子島が言い終わる前に、滝澤と曾我は出かけてしまった。最後まで聞いた桐谷は、ソファから

立ち上がると、タバコを唾えたまま「リョーカイ」と返事をして部屋を出る。最後のひとり黒部はスマートフォンを弄りながら出ていく。

室内は静寂に包まれた。私がおそるおそる獅子島を見上げると、彼はにっこりと微笑む。

「さて、里衣が快く軟禁を受け入れてくれたことですし、さっそく私の部屋にご案内しましょう」

獅子島は土埃が積もった床をザリザリと音を立てながら歩き、事務所を出る。照明のついていない真っ暗な階段を上がついていく彼に、私は恐々といく。

「暗いので足元に気をつけてください。この上は私室だけで、誰かを招くこともなかったですからね。階段に照明をつけていないのです」

「はあ……」

やがて獅子島は、三階にある無骨なスチールドアを開いた。

一体この先はどんな部屋になっているのだろう。下と同じように汚かったらいやだなあ、と思っ  
ていると、彼は「どうぞ」と手招きした。

ゆっくり室内に入ってみたら、意外と普通の部屋だった。

しかし、酷くシンプルだ。打ちっぱなしのコンクリートの壁に、床は黒茶色のフローリング。

部屋の間取りは二階の事務所と似ている。部屋の左角には、セミダブルのパイプベッドとパイプハンガー、黒いラック。向かいの角にはミニキッチンと冷蔵庫、小さなテーブル、椅子がふたつ。家具はそれくらいしかない、殺風景な部屋だ。ベッド側の壁には事務所と同じ磨り硝子の窓がある。カーテンはない。

「元々この部屋は、下の事務所と同じ造りになっていたのですが、生活しやすいように手を加えましてね。まあ、男のひとり暮らしですから多少使いづらいところはあるでしょうけど、慣れてください」

「あの、私がここで生活するのはいいですけど、獅子島さんもここに住むですよね？」

「もちろんです。ここは私の住居なのですから」

「あっさり肩を落とす。ブラック会社に勤めていても、プライベートだけは平和だったのに。なぜ、突然見知らぬ男とふたり暮らしをするはめに陥っているのだろう。」

「ベッド、ひとつしかないんですけど」

「ええ、何か問題が？」

問題ありありだ。この男は常識が欠如しているのだろうか。それともヤクザなんて職業の人に常識を求めるのが間違っているのか。

「あ、あの、せめて部屋を分けてもらいたいですけど」

「残念ながら、この部屋しか生活に適していませんよ。そっちのドアの向こうは浴室やトイレですし、あちらのドアの先は私の趣味部屋になっていますので」

「……趣味部屋？」

獅子島が指さしたのは、ベッドがあるほうと真逆の方向。そこには黒いドアがあった。

趣味。そういえばこの人、趣味に付き合えとか言っただけだったわけ。

私の思考を読んだように、獅子島はにっこり微笑んで私の手を握ってくる。

「思い出しましたか？　そうです。あの先にある部屋は、あなたにとって無関係ではありません」

「つまり、あの部屋の中に、付き合ってほしい趣味のものがあるってこと？」

「ええ。少し大変かもしれませんが、そのうち慣れるでしょうし、最初は我慢してくださいね。できれば里衣にも楽しんでもらいたいですけど、それはおいおいということ」

ふふ、と意味深に笑う。しかしその笑みは不思議と不安を煽る。

一体なんなんだ、獅子島葉月の趣味って。

「せっかいですから、見てもらいましょうか。多少ごちゃごちゃやりますが、もしあの部屋で生活なさりたいのであれば止めませんよ。一応ベッドもありますしね」

「……ベッド、あるの？」

趣味部屋に？　頭の中が疑問符でいっぱいになる。

しかしベッドがあるなら、たとえ部屋が散らかっていてもいい。是非その部屋で生活させてもらいたい。

獅子島はドアノブに手をかけつつ、「そうだ」と思い出したように顔を上げた。

「里衣。私の趣味を教える前に、ひとつお願いがあるのですけど、よろしいですか？」

「よろしいですか、などと温和に問いかけているけど、私に拒否権はないのだろう。おとなしくクリと頷くと、獅子島は優しく目を細める。」

「ずっと言うタイミングをうかがっていたのですが、私のことは葉月と名前で呼んでいただきたいのです」

「です」

「な、なまえ？」

思わぬお願いに目を丸くする。獅子島は「ええ」と相槌を打ち、軽くため息をついた。

「実は、獅子島という姓は私の周りに何人かいますね。勘違いされることがないよう、呼び名を分けてほしいのです」

「はあ、そうですね」

「里衣とは当分の間、一緒に暮らす仲になりますからね。よろしいですか？」

ドアをキッと開けながら、彼はあらためて問いかけてくる。

「……まあ、名前を呼ぶくらい、構わないけど」

「ありがとうございます。では、こちらが趣味部屋になりますよ、里衣」

先に中へ入り、私を誘う獅子島。

趣味とは一体なんだろう。胸をドキドキさせつつ部屋に入ると、そこにはある種の異空間が待ち受けていた。

——なに、この部屋。

六畳ほどのごちんまりしたそこには、先ほどの部屋と同じフローリングが続いている。

暗く窓のない部屋。中に入った彼が電気をつけると、天井についているダウンライトが灯り、その『趣味部屋』の全容が目飛び込んできた。

……が、理解できない。

天井には、頑丈な鉄パイプが張り巡らされている。そこから鎖と金属フックが垂れ下がっていた。

そして奇妙な椅子がある。脚が床に固定されていて、椅子だけがクルクル回るようだ。そして足をのせるところが開いている。あそこに座る時は、自然と足を開かねばならないだろう。

さらには、病院の診察台を思わせる黒いベッドが置かれている。ベッド脇には腰高のカウンターとガラス扉のついたキャビネットがあり、中には銀色に光る医療器具のようなものがいくつか並んでいた。まるで手術でもするかのようだ。

他にも用途不明なものがいくつかあって、奥の壁一面はクローゼットになっていた。

殺風景なリビングとは一変して、確かにごちゃごちゃしている。

それにしても、一体何をする部屋なんだろう。まったく予想がつかないけど、嫌な予感だけはひしひしする。ここは勇気を振り絞って聞いてみるしかない。

「ちよ、ちよ、ちよちよちよ」

口が回らなくて、どもってしまう。そんな私に、獅子島は変わらぬ調子で言う。

「落ち着いてください」

「ちよっと獅子島さん！ あのー！」

「名前を呼んでくださいとお願いしたでしょう？」

「は、葉月さん！ あの、これ、どうい……ここは何をする部屋なの!?」

「何をするって、この部屋を見てわかりませんか？」

わかりません。あと、理解したくありません。

完全に腰が引けている私を見て、獅子島、もとい葉月さんがふうむと腰に手を当て、顎に指を添

える。その指が、すつと室内の一点を示した。

「例えばあれなんか、有名だと思いますよ。部屋の雰囲気（はま）に箔（はく）がつくかなと思って、インテリア代わりに買ってみたのですけどね」

ソロソロと彼の指さす方向に目を向ける。そこには、馬の形を模した乗り物が置かれていた。まるで公園にあるバネの乗り物だ。だけど馬の顔はやけにとんがっていて、背の部分が三角形になっている。そして足をのせるところや馬の頬の部分から鎖が垂れ下がっていて、鎖の先には手錠（ていじょう）や枷（かぎ）があった。

おそらく、あれは三角の背に人を座らせ、手足を拘束するものではないだろうか。うん。使い方はなんとなく理解した。でも、そんなことをしたら、めちゃくちゃ痛いよね？

私は身体を震わせながら、首だけを葉月さんのほうに向ける。

「あの……葉月さんもしかして私を、ご、拷問（ごうもん）でもするつもり、なの？」

「拷問（ごうもん）してほしいんですか？」

ぶるぶるぶるつと高速で首を横に振る。されたくないに決まっている。

だけど、あれもこれも拷問（ごうもん）するための器具に見えてきた。だってどの置き物にも手錠（ていじょう）や足枷（あしかぎ）みたいなものが垂れ下がっている。

葉月さんは優しく目を細め、「冗談（じょうだん）ですよ」と笑った。

「これが私の趣味なんです。私の趣味はですね、性調教（せいちょうきょう）なんですよ。あくまで趣味なので、お遊びみたいなのですけどね。里衣（りい）、これからはどうぞ、私の趣味に付き合ってくださいね」

爽（さわ）やかに歯を光らせ、優しい口調でとんでもないことを言ってくる。

「あ、ちなみにこの器具はすべて新品です。私の趣味で改造しただけの部屋なので、まだ誰ひとり入れたことがないですよ。安心してくださいね」

私は一体どう安心したらいいのだろう。葉月さんの言っていることがわからない。とりあえず自分が大ピンチということはわかった。

いや、ピンチと言うのなら、私が接触事故を起こした時から、危険信号がピカピカと光っていた。しかし今はそれを凌駕（りやうが）して、もっと具体的かつ真剣なピンチだった。

だって『調教の相手になれ』なんて、無茶（むちゃ）ぶりにもほどがある。

そんなことは、絶対にやりたくない！

それに、ろくに知識も持たない私が、この人を満足させられるとも思えない。

「む、無理だよ。私、ズブの素人（しろうと）なんだよ!？」

「知っていますよ。あなたがプロだったら、それはそれで驚きます」

くすくすと笑う葉月さん。どうしよう、どうやったら説得（せつとく）できるんだ。

「そうじゃなくて、私、こういう趣味ないし、そもそも興味もなかったから知識もないし。だから、あの」

「別に無理（むずかしい）強（こわ）いはいませんが、断（つ）るなら約束（やくそく）を違（ちが）えたということで、あなたをお風呂（お風呂）に沈（しず）めますよ」

「……お風呂?？」

キョトンと首をかしげると、葉月さんがニッコリする。

「風俗店で働いてもらうということですよ」

「ぎえ!? で、でも、絶対無理だよ! だって、わかんないもん。こ、こんなとか、あんなのとか、使い方とか全然わかんないし!」

必死に椅子やベッドを指さして喚く私。しかし葉月さんは「え?」と意外そうに首をかしげた。

「使うのは私なんですから、あなたが使い方を覚える必要なんてありませんよ」

「ごもつともな言葉に、私は言い訳を失って口ごもってしまう。」

「い、いや、そうかもしれないけど……何より、こんなの付き合えて言われても、付き合えないよ! わ、私、マゾじゃないし!」

調教されることは、鞭で叩かれたり、ろうそくを垂らされたりするんでしょう? そんなの嫌に決まっている。世の中には、そういうことをされるのが好きな人がいるらしいけど、私は違う。痛いのも熱いのも嫌だ。

それなのに、何故か葉月さんはすごく嬉しそうに、満面の笑みを浮かべた。

「もちろん存じていますよ。逆にマゾに目覚めていたら困ります。全力で嫌がるから、楽しいんじゃないですか。泣きわめいて拒絶する相手を、無理矢理拘束して好き勝手するのがいいんですよ。やがて相手が快楽に目覚め、屈辱の中でオーガズムに達する瞬間、私はカタルシスを感じるのです。だから、里衣は私に遠慮することなく嫌がってくださいね」

な、何を言っているんだろう、この人は。彼の言葉は半分以上が理解不能だ。

本当に、こんなオソロシイところで生活しなくちゃいけないの?

身体がガクガクと震え、半泣き状態の私に、葉月さんは菩薩のような微笑みを向けてきた。

「どうしても辞退なさりたいのであれば、それでも結構ですよ?」

「で、でも、辞退したら、私は風俗店に売られるんだよね?」

葉月さんは、事もなげに「はい」と頷く。なんてことだ。これは究極の選択である。

風俗店で金を稼ぐか、ここで事務職として金を稼ぎながら葉月さんの趣味に付き合うか。はつきり言って、どっちも嫌だ。

しかしそんなことも言えずに、私はただただ震える。

すると葉月さんは、キャビネットを開き、黒い鞭を取り出した。葉月さんが振ると、鞭はピシィッとなる。

「せっかくですから軽くウォーミングアップをしておきましょうか。あなたのことも、ちゃんと知っておきたいですからね」

鞭の先を軽くしならせながら微笑む葉月さんは、めちゃくちゃ怖い。

あと、ウォーミングアップって何? 調教用語? 違うよね。

私はじりじりと葉月さんから距離を取り、ついに壁にべたりと張りついた。

「ああああああの、ほら、あの、い、今はちよつとつ、ほら、夜ですし!」

「ええ。これから夕飯を食べて寝るだけですから、丁度いいじゃありませんか」

言い訳のチョイスを間違えたらしい。私は慌てて方向転換する。

「丁度よくない！ あああ、あと忘れてたけど、ごはん食べた！ お腹がすきました！」

「調教が終わったらごはんをあげますよ」

「ひい！ や、あの、ほら、桐谷さんたちが帰ってくるかもしれないし……！」

「この部屋は防音になっておりますので、物音は階下に響きません。それから所員のことはまったく気にしないで結構です。彼らは私の趣味を理解していますからね」

理解済み!? つまり私がこういう目に遭うことを知っているのか。恥ずかしい！

いよいよ逃げ場がなくなつて身体をこわばらせる私の前に、葉月さんがしゃがみこむ。そして下から覗き込むように私を見上げると、ツイッと胸元を、鞭の先でなぞってきた。

「さあ、そのベッドで横になつてください。まずはあなたの身体を『点検』させてもらいますよ。もちろん抵抗なさつても結構ですけどね」

どうせ抵抗しても無駄なんだよね……

私は一分ほど悩んだあと、トボトボ歩いて黒い診察台——もといベッドに向かった。すべては自業自得なのだ。そもそも車をぶつけなければ、こんな悲惨なことにはならなかった。

私はしぶしぶベッドに上がる。横になると、葉月さんが鞭を持ったまま近づいてきた。

葉月さんは満面の笑みで、私の頬に鞭をピタピタと当ててくる。そして「いい表情ですね」と満足そうに言った。一体私はどれだけ怯えた顔をしているのだろう。

「さて、では脱がしますね」

「ままま、待つて!？」

仕事着であるスーツの上着に手をかけられて、私は慌てて葉月さんの手首を掴む。眼鏡がきらりと光り、彼は嬉しそうな顔をした。

「なんでしよう。もしかして自分で脱ぎたいのですか？」

「そそそそそんなわけないっ！ そうじゃなくて、な、なんで脱がすの？ 点検つて、脱がないとだめなの!？」

「当然でしょう。脱がなければ、何もはじまりません」

まじか。ウォーミングアップの時点で脱がなくなてはいけないのですか。

脱がないといけないと思うと、急に恥ずかしさの度合いが上がる。それになんとか怖い。

「つて、ああーっ！ すでに脱がされてる!!」

私がボヤボヤ考えている間に、葉月さんはスーツの前ボタンをはずし終え、ブラウスのボタンまですずしていた。なんて手が早いんだろう。

慌ててブラウスの前を閉じようとする、葉月さんはそれを制止するように、私の喉元にピタッと鞭を突きつけてくる。

「駄目ですよ。隠してはいけません。そう、手を下ろして。次に抵抗したら、拘束しますからね」

「……うう」

力なくだらりと腕を下ろす。抵抗しても状況を悪くするだけだ。どうしても無視できない抵抗感があるけれど、私は必死にその感情を抑え込む。

すると、葉月さんがくすくすと笑った。

「この程度で恥辱を感じているとは、先が思いやられますね？ とつても楽しみです」  
「っ、意地悪」

葉月さんは細い鞭を手の内で回し、グリップをブラの下から差し込んだ。そしてグイツとブラを上にはずらす。

「ですが、意地悪とはまた、可愛い表現ですね。はじめて言われましたよ」  
葉月さんが何か言っているが、それどころではない。

だって、胸が露わになっているのが、恥ずかしくてたまらない。

「ささやかな胸ですね。もしかしてAカップですか？」

「失礼な、Bだよ！ そ、それに、寄せて上げたら、Cカップのブラも入るから！」

「最近の下着は詐欺ですよねえ。黒部がガツカリおっぱいと名付けていましたよ」

黒部……あのホストっぽい茶髪男か。ガツカリおっぱいとはまた酷い名付けだ。

葉月さんの鞭がゆるりと動く。鞭とは本来打つものだが、葉月さんはどうやらそれで私を傷つけるつもりはないらしい。ただ、硬い鞭の先で私の胸をなぞっていく。線を描いたり、乳輪の形を辿ったりを繰り返す。

気づけば私はこぶしを硬く握り、フルフルと小刻みに震えていた。

「もっと力を抜いてもいいですよ。今日は点検だけですし、何もみせんから」

裸を見たり、鞭で胸を弄ったりすることは、私の認識では『何かしている』うちに十分入る。し

かし、彼にとってはそうではないらしい。だとすると、点検が終わった後に何が待ち受けているのか——怖すぎて考えたくもない。

胸を鞭でつつき、本当に点検をするかのようにジッと凝視する葉月さん。

どうしても恥ずかしくて、顔を背けてしまう。

「色白ですね。乳輪も綺麗な色をしていますし、形もいい。乳首がやや小さいですね。ここだけは少し幼い感じがします」

ツン、と胸の先端をつつかれた。びくりと肩を揺らし、目をぎゅつと瞑る。

「感度は今ひとつですね。もしかして里衣は、自分でここを弄ったことがないのですか？」

「っん、ないよ、一度も」

「ふむ、開発してないのですね。ここはいわゆる性感帯のひとつですよ。いくらでも気持ちよくなる場所です。ほら、今も少しずつ気持ちよくなっていますか？」

「あっ」

っん、っん、と胸の尖りをリズムカルにつつかれる。そのたびに肩が揺れ、我慢したいのに声が勝手に出てしまった。

「はっ、んっ……やあ……なんか、変な感じ。これが気持ちいい、の？」

戸惑いながら聞けば、葉月さんはわずかに片眉を上げた。そして鞭を持つのは逆の手で、じかに胸を触ってくる。温かくて乾いた、大きな手。それが胸を覆い、ギョツと強く乳首を摘まんだ。

「いッ……！」

痛い抗議しなかったが、『次に抵抗したら、拘束』という言葉思い出して、言葉をのみ込む。「あなたは性感にまったく慣れていませんね。里衣の男性経験をお聞きしてもよろしいですか？」  
「だっ、だんせいけいけん!? そんなのないよ！」  
「一度もないのですか？」

意外そうに目を丸くする。いや、まだ二十歳だし。この年なら、まだ一度も男の人と付き合ったことがないというのは、そう珍しいことではないと思うんだけど。

「一度もないよ。田舎から都会に来て以来、ずっと仕事が忙しかったから、恋愛なんてする暇なかったし」

「なるほど。健全でわびしい社会生活を送られてきたんですね。つまり里衣は処女ということですか？」

「しよっ……!! ま、まあ、そう、だけど」

顔に熱が集まるのを感じながら頷く。なんでこんな恥ずかしい問答をしなくてはいけないのだ。

そもそも、調教に処女かどうかなんて関係あるのかな？

——その時、ニヤリと、葉月さんが薄く笑った。

それははじめて見る、酷薄で冷たい笑みだった。穏やかさや優しさなどの人間味のある要素をすべて削ぎ落としたような、うすら寒い笑顔。

「ふうん？ それはまた都合がよい……」

葉月さんが、きゅ、と乳首が摘まむ。そして親指と人差し指で擦りはじめた。

「初心そうな娘だと思っていましたけど、まったくの未開発だったとは。これは調教のしがいがありますね。ゆっくと身体に教え込み、性の快楽を覚えさせましょう」

くすくすと笑う葉月さんの笑顔が怖い。

私は一体何をされて、どうなってしまうのだろう。得体の知れない不安が増していく。

「ほら、ここを擦ると気持ちがいいでしょう。この感覚を覚えてくださいね」

そう言いながら、葉月さんは私の乳首を擦り続ける。肌が粟立ち、ざわざわする気がするが、これが『気持ちいい』ということなのかは、よくわからない。

「ん、や……!! 気持ち、いい?? なんだか、不思議な感覚しかないけどっ」

「ええ。そのうち自分でも擦りたくなりますよ。乳首でイけるようになりますよ。ああ、これからのことを考えると、すごくわくわくします。処女を散らす前に、できればクリトリスとGスポットの開発まで済ませておきたいですね。たくさん感じられるように、がんばりましょう」

葉月さんがにつこりと笑う。その笑顔は冷たいものではなかったので、少しホッとした。

でも、知らない単語ばかり出てくるし、彼の言っていることはやっぱりわからない。

すると葉月さんの手が動き、腰のくびれをなぞる。そして私の膝をぐっと持ち上げた。スカートがめくれ上がり、ストッキングを穿いた太ももが見えてしまう。

「あっ」

その上、足を開かせようとしてきたので、私は慌てて葉月さんの手首を掴んで足を閉じる。

葉月さんがニイと嬉しそうに目を細めた。

「抵抗しましたね？」

「っ、や、これは、その」

「言いましたよね。次に抵抗すれば拘束すると」

「ご、ごめんなさい。だって、つい」

足を開けば下着が見える。もうすでに上半身は何も身につけていなくて、十分恥ずかしかったが、下半身はもつと恥ずかしい。

葉月さんは私の謝罪など聞く耳も持たず、寝台の四隅に垂れ下がっていた鎖を手取る。

「ここで、はつきりと教えて差し上げましょうか。私は反抗的な人は好きですが、対応を甘くするつもりはありません。言葉だけの謝罪で許されると思ったら、大間違いです」

彼は笑顔のまま、短い鎖に繋がる手錠をがしやりと開く。そして手際よく私の両手首に手錠をはめた。いわゆる万歳の体勢だ。

「開脚させたいので、足には枷かぎではなくこちらを使いましょうか」

葉月さんはキャビネットの引き出しを開け、中から何かを取り出す。それから黒いガムテープのようなものを私に見せて、説明する。

「これは拘束テープと言っていますね。粘着剤が使われていないのですが、テープ同士はくっつく不思議な代物です。肌を傷つけずに拘束できる、便利なものですよ」

世の中にはそんな便利なテープがあるのか。もしかしてこういう趣味の道具って、種類が豊富な？

そんなことを考えているうちに、葉月さんは私の膝を曲げ、手慣れた様子でクルクルと拘束テープを巻きつけてしまった。

拘束テープによってふくらはぎと太ももがびったり合わさり、大きく足を開かれる。はたから見れば、私の姿はさぞ滑稽こっけいだろう。

しかしどんなに恥ずかしくても、手足を拘束されては身動きが取れない。

「あ、失敗しましたね。拘束する前に下着とストッキングを脱がせばよかった」

軽く照れ笑いをする葉月さん。その表情は可愛くて子供っぽいけど、やってることはとても酷ひどい。「仕方がないので切りますね」

「切る？ って、ちよっ、まっ」

物騒なセリフにおののいていると、葉月さんはキャビネットから大きな裁たちバサミを取り出した。何を切るの？ まさかストッキングと下着をそれで切っちゃうの？

「や、やあーっ！ やだあ！ 下着は切らないで！ だってそれ切ったら、私、穿はくものがなくな……っ」

手錠をがしよがしよ鳴らして揺らし、足を左右にブンブン動かす。しかしすでにシッカリと拘束されているから、ろくに抵抗できていない。

葉月さんはストッキングを掴つかまんで、容赦なくビリビリに引き裂いてしまった。

「ひい……。わ、私のストッキングが……」

半泣きになる私に構わず、葉月さんの興味は私のショーツに向かう。腰の左側にひやつとした金

属が触れたと思った瞬間、シャキンといつそ涼やかな音を立てて、ショーツを切られた。右側も同じように切られ、ショーツはただの布きれと化す。葉月さんが布を引っ張ると、その布きれもあっけなく抜きとられてしまった。

「うう、酷ひどい……。パンツだって高いのに」

「後で用意して差し上げますよ。こんな色気のないものでなく、もう少しセクシーな下着をね」  
「いやない。私は普通の綿の下着がいい。だけどそんな要望は聞いてもらえないだろう。」

意地悪ヤクザの葉月さんは、につこりと微笑み、眼鏡の奥からジッと私を見つめる。

「さて、それではこちらもしっかりと点検させてもらいましょうね」

わざわざ宣言してから、私の膝を掴んであらためて大きく開かせる。秘所に指が添えられ、柔肉をばつくりと開かれた。

恥ずかしくて声も出ない。唇を引き締め、震えながら羞恥しゆうぢに耐える。

スー……と秘所に冷たい風を感じた。普段閉じているところが、外気を敏感に感じ取っている。

身体の震えがしだいに強くなり、歯はがちがちと音を立てた。手首に繋がれた鎖にも震えが伝わり、チャラチャラと鳴る。

身体に力を込めて耐えていると、秘所にツンと硬い何かを当てられた。

「綺麗な色をしていますね。ほら、このあたり、わかりますか？」

「っ、ん。見えないから、わかんないよっ」

羞恥しゆうぢから逃のがれたくて、やけくそ気味に叫ぶ。すると葉月さんは「そうですねえ」と笑った。

「じゃあ見てもらいましょうか」

「へ？ それってどういう……きゃあー！」

思わず悲鳴を上げてしまう。なんと、いきなりベッドが動き出したのだ。

てっきり普通のベッドだと思っていたけど、コレ、可動式だったのか……

「病院にこういうベッドがあるでしょう？ あれが便利そうだったので、特注で作ってもらいました。一見普通のベッドですから、動くななんて思わないですよね？ 驚いてもらえて嬉しいですよ」

くすくすと笑って、いつの間にか手にしていた小さなリモコンを操作する葉月さん。

低い可動音と共に、背もたれ部分が上がっていく。両手は拘束されたままだから、いよいよ万歳のポーズになってしまった。

葉月さんは、キャビネットから四角い卓上ミラーを取り出し、私の足の間にコトンと立て掛ける。

「ひっ！」

目を見開き、身体をのけぞらせてしまう。鏡には私の秘所が映っていた。

かっとな身体が熱くなる。こんなの見たくない。顔を背そむけて目を瞑まぶると、私の頬にぴたりと何かが当てられた。

「駄目ですよ。せっかく私が見せて差し上げているのですから。ちゃんと見てください」

頬に触れる硬い感触。おそらく、先ほどの鞭むちの先端だろう。それを動かし、私の頬をさらりと撫なでてくる。

「だ、だって、こんなの……っ」

「私が言っているのですから、あなたは見なければならぬのですよ。言うことが聞けないのなら、あなたの身体に直接教えてあげなければなりませんね」

「教える……って、何を？」

そう言った瞬間、ビュッと風を切る音がした。同時に、首のあたりに鋭い風を感じる。驚きで目を開いて葉月さんを見ると、彼は不敵な笑みを浮かべながら鞭を構えていた。

「今のはわざと空振りさせましたが、まだ私の言うことが聞けないのでしたら打ちますよ。しつても大事な調教ですからね」

「っ、そんな、な」

「あなたは痛み慣れていないでしょうし、最初は優しい鞭から教えようと思っていました……反抗するなら話は別です。私は、今、この鞭を振っても構わないのですよ。ちなみに、鞭には様々な種類がありまして、これは特別痛いほうです。下手に打てば肌を裂き、出血するでしょうね」

出血……血が出るの？ 肌が腫れるどころか、裂けちゃうような鞭なの？ それって、めちゃくちゃ痛いよね。

茫然とする私をよそに、葉月さんはうっとりとして鞭を眺める。そして心底愛おしそうに、黒い鞭をゆるりと撫でた。

「鞭にはこだわりがありますね。これは私が特別気に入っている鞭です。打たれたら、きつと、とても痛いですよ。裂傷は治るのに時間がかかりますから、数日痛みが続くでしょうね。けれど、私はあなたを苦しめたいわけではありませんから、綺麗に治して差し上げます。傷跡ひとつ、残さ

ずにね」

くすりと笑う葉月さんの笑みは、どこか妖艶だった。でも、それ以上に凶悪だ。

——この人はやる。脅しじゃない。次に私が言うことを聞かなかつたら、容赦なく鞭を打つ。

鼻がツンとして、目に涙がにじみそうになる。

しかし、ぐっと唇を結び、泣きたい気持ちを噛み殺す。こんなところで泣きたくない。泣いたら負けだ。

私は屈しない。この人がどんなに意地悪でも、要求された金額分働けばいい。それまで我慢すればいい話なんだ。

自分自身にそう言い聞かせて、鏡を覗みつけた。

すると、葉月さんがくすくすと楽しそうに笑う。

「そんなに鬼気迫った顔で自分の性を凝視する人なんて、はじめて見ましたよ」

「み、見ればいいんですよ。なら、お望み通り見てやるわよ！」

「ふふ、その意気です。あなたは私が思っていたよりもずっと興味深い。気に入りましたよ」

いいえ、気に入ってもらわなくても結構です。嫌な予感しかしませんから。

顔を歪ませて鏡越しに自分の秘所を見つめていると、葉月さんが人差し指と中指で秘裂を開いてみせた。

思わず、ぐくりと唾をのむ。はじめて見る私の秘所は、ピンク色でぬらぬらしていた。

「いいですか、里衣。私が今指で触れている部分が大陰唇、内側のここが小陰唇。ふたつとも性感

帯があります。例えば大陰唇だと、このあたり……」

彼は二本の指で秘所を割りながら、鞭の先で大陰唇のフチをなぞってきた。

「ひゃ！」

びくと腰が浮く。茂みを優しく分け、羽で撫でるほどの力加減で、薄く線を描くように鞭を動かす葉月さん。

背中がぞわぞわして、なんとも奇妙な感覚がした。まるで身体中の産毛を撫でられているみたいだ。

「っ、んん、ふ……うっ」

「くすぐりたい？ それとも、気持ちいいですか？」

「わ、かなな、はっ！」

次は小陰唇の部分に鞭の先が触れてくる。色が沈んだひらひらしたところ。その形を辿るように、鞭の先がスツツと動く。ぞくぞくした感覚が強くなって、腰の後ろが激しくうずいた。

「ん、あっ、そこはっ」

「少しずつ感覚がよくなっているようですね。ちゃんと鏡を見えますか？ あなたが感じているところはここですよ、ここ」

「やあっ！ あの、何度もなぞらないで。み、見てるからあ」

はっはっと思を短く刻みながら、鏡を見つめる。

指でぱつくりと開かれた小陰唇を、葉月さんは見せつけるように何度も鞭の先で撫でてくる。

どうして？ とても恥ずかしいのに、時々うっとりした感覚に陥る。これが気持ちいいってこと……？

「里衣。ここがクリトリスです。ほら、この小さな丸いところですよ」

「っ、く……くり、とりす？」

「ええ。ここが女性にとって一番敏感に感じる場所なんです。だから強く刺激してやると……」

「ああっ!!」

葉月さんが鞭の先でグリツと押し出すようにそこを突いてきて、身体中にビリビリした衝撃を感じる。思わず、膝をぎゅうつと閉じてしまう。

葉月さんはクスクスと笑って再び私の膝を開かせながら、「驚いたでしょう？」と眼鏡の奥にある目を細めた。

「ここはとても敏感なんですよ」

彼は笑顔で、さらに秘所の奥を開く。

「さて、いろいろ説明しましたが。ここが膣口ですよ。穴が空いているでしょう？」

「え、あ……うん」

戸惑いながらも頷く。鏡の向こうに見える秘所は、赤くぬらぬらしている。その奥に、小指サイズの穴が見えた。

「この奥にあるのが子宮です。性交をして精子が卵巣に着床すると、子供ができる場所です」

「ソ、ソウデスネ」

なんだか保健体育の授業でも受けているみたいだ。

私の相槌に微笑み、葉月さんは鞭の先で膣口の周りをくるりとなぞった。なんだかぞわぞわしたものが身体中に走る。

「あ……っ」

「ふふ、感じますか？ ここも性感の強い場所ですよ。他にもたくさんありますから、少しずつ教えてあげますね」

ツ、ツ、とリズムを取るように、鞭の先で膣口を優しく撫でられる。そのたびに、じわじわした感覚が襲ってきた。なんだろう。むずむずする。身体中が少しずつ熱くなっていく。

「里衣の身体は素直でよろしいですね。少し愛液が分泌されているようです。ほら、鞭の先が濡れている。これはあなたが濡らしているのですよ。性器は気持ちよくなると濡れてくるのです」

「う、うん……。はあっ……あ」

葉月さんが鞭の先を柔らかくに動かし、閉じていた秘所の内側を、ツツ、となぞり、蜜口のそばでくるりと回る。

「は、あ……。う、んっ」

腰のあたりがじわじわしてくるこの感覚が気持ちいいということなのだ、本能を感じ取ってしまつたようだ。

私自身が感じたくないと思っても、身体が鋭敏に感じ取る。

「ん、は……。あ、あっ」

葉月さんの鞭は止まらない。クリトリスのまわりをくるくると回り、縦に線を引くように、秘所の真ん中を割る。彼の指によってぱっくりと開かれた秘所を好きなように弄られ、私の息が上がっていった。

恥ずかしくて堪らない。もうやめてほしいのにそれを口にするわけにもいかず、寝台に繋がられた短い鎖が鳴り響くだけ。

「あ、ああっ、ん、は……っ」

蜜口の大きさを計るみたいに鞭が円を描き、ゆっくりと何かを拭いとる。黒くしなやかな鞭には、ぬらりとした液体がついていて、ダウンライトに反射して光っていた。愛液と彼が呼んでいたもの。葉月さんは手を止めることなく、濡れた鞭の先で色の沈んだひらひらしたところをなぞる。

「ひゃ、あ！ あ、んんっ！」

びくびくと腰が震えた。拘束テープで固定された膝が笑い出す。

自分から分泌された液体は、少し粘り気を帯びていて、やたらと滑りがいい。ぬるぬると小陰唇のフチを撫でられると、得も言われぬ感覚が襲いかかってくる。

ぬちぬちと音を立て、私の蜜を塗りつけるみたいに、葉月さんは鞭の先で秘所を弄り続けた。

「なかなかいやらしい仕上がりになってきましたね。里衣もそう思いませんか？」

くすぐすと葉月さんが笑い、小陰唇をめくって、そこにも蜜を塗りつける。

「おもわな……いっ！ あ、んんっ」

ぐっと奥歯を噛みしめると、蜜口からとろりと液体がこぼれ出た。